

## 諏訪・大宮流の鷹書

——廣田宗綱筆『鷹書才覚卷抄出』全文翻刻——

二本松 泰子

はじめに

鷹狩りにおける「諏訪流」とは、信濃国諏訪大社の贊鷹の神事に端を発し、中世期～近世期において我が国で最も隆盛した鷹術の伝派である。同派は大別すると信濃国在地の禰津一族の流派と京都に進出した同族の諏訪円忠の子孫が携えた流派とがあり、前者は主に近世になつてから徳川幕府の庇護を受けて栄え、後者は南北朝期の足利幕府に仕えることによつて隆盛した。このうち、信濃国在地の諏訪流の方は、一四世紀頃の禰津一族の鷹飼・大宮新藏人宗光（禰津貞直の四代の子孫）<sup>①</sup>が創始したといふ「大宮流」が本流とされる。この大宮新藏人宗光は、国立公文書館内閣文庫蔵『鷹啓蒙集』第七冊奥書（函号一五四・三一〇）によると、

ところで、その大宮流の流れを汲む鷹飼に禰津松鶴軒（信直・政直）<sup>②</sup>という人物がいる。『信州滋野氏三家系図』<sup>④</sup>によると大宮新藏人宗光すなわち禰津宗光から一八代目に当たり（栗原柳庵著の『柳庵雑筆』第二巻による）と宗光より一五代裔とされる）、戦国時代末期～江戸時代初期にかけて活躍した武将である。彼が徳川家康に重用された所縁で、近世期を通じて徳川幕府の職制としての鷹飼は代々諏訪・大宮流が継承することになった。いわば諏訪・大宮流の中興の祖ともいえるこの禰津松鶴軒は、多数の鷹書類を著作・書写しており、戦前の宮内省式部職が編纂した『放鷹』『本邦鷹書解題』<sup>⑥</sup>によると、当時の宮内省図書寮には天正一六年（一五九二）の年紀と「禰津松鶴軒常安」の名前が見える奥書を持つ松岡本『才覚之卷』が所蔵されていたという。この松岡本『才覚之卷』が現存すれば、

近世前期以降の書写本しか存在していない『啓蒙集』よりも古いことになり、諏訪・大宮流の中世におけるテキストとして注目に値する。

しかしながら、宮内序書陵部で現在所蔵されている『才覚之卷』（函号

と見え、彼の放鷹の教えを集約した書物が『啓蒙集』と称されたといふ。この『啓蒙集』なるテキストには異本が数多くあり、たとえば、宮内序書陵部には抄本を含めて一六本が現存し、国立公文書館内閣文庫に

一六三・九二二八）には如上のような記述は見えず、そもそも奥書 자체が記載されていない。同書の内容としては、宮内庁書陵部蔵『啓蒙集』（函号一六三・九〇二）と一部重複することから、大宮流の流れを汲むテキストであることは相違なく、『放鷹』が紹介する禰津松鶴軒所縁の松岡本『才覚之巻』と極めて近い系統の伝本であることが予想される。が、先にも述べたように同書には奥書が無く、書写年代等の詳細について確かめるすべは無い。ただ、少なくとも受け入れ印に「昭和3年12月伯爵松平直亮寄贈」と見えることより、出雲松江藩最後の藩主である松平定安の子息・松平直亮の寄贈本であることが確認され、同書が松岡辰方の蔵書である松岡本『才覚之巻』と別物であることは断定できる。

ところが、今回、奥書に天正二二年（一五八四）の書写年紀が見える廣田宗綱筆『鷹書才覚卷抄出』が新たに発見された。その本文は宮内庁書陵部蔵『才覚之巻』とほぼ一致しており、同系統の伝本であることが認められる。ということは、同書もまた諏訪・大宮流のテキストと判じられ、しかも松岡本『才覚之巻』よりも古い書写年紀を持つことから、管見において諏訪・大宮流の流れを汲む最古の鷹書ということになる。<sup>⑧</sup>

そこで、本稿では廣田宗綱筆『鷹書才覚卷抄出』の全文翻刻を掲出する。いずれ『啓蒙集』本文の考察と併せて諏訪・大宮流の鷹書類を解明する布石として、まずはその本文を紹介したいと思う。

- 注
- ① 『柳庵雑筆』第一巻（『日本隨筆大成第三期3』所収、日本隨筆大成編輯部編、吉川弘文館、一九七六年一二月）などによる。
  - ② 抽著『中世鷹書の文化伝承』第二編第三章「諏訪流の鷹術伝承（二）」（三弥井書店、一二〇一年二月）。
  - ③ 抽著『中世鷹書の文化伝承』「資料紹介 宮内庁書陵部蔵『啓蒙集』」。
  - ④ 『続群書類從第七輯上』所収。

⑤ 前掲注（1）に同じ。

⑥ 『放鷹』（宮内省式部職編、一九三一年二月、吉川弘文館、二〇一〇年六月新装復刻）。

⑦ 抽著『中世鷹書の文化伝承』第二編第一章「諏訪流のテキストと四仏信仰」など。

⑧ 『才覚之巻』を称する鷹書としては他に、永青文庫所蔵の『鷹書才覚之巻抄出』一冊があるが未見。

### 【凡例】

一 翻刻は廣田宗綱筆『鷹書才覚卷抄出』によつた。

一 翻刻に関しては、できるかぎり原文に忠実になるようにつとめ、改行は原本に従つた。

一 改丁は「」をもつて示し、（一オ）のように丁数ならびに表裏を示した。一字体は底本の表記を重んじて旧字体の場合はほぼそのまま翻刻した。一 花押は（花押）とし、その形態は示さなかつた。（ママ）をつけた。

一 明らかな誤字や脱字などと思われる箇所はそのまま翻刻し、傍らに改丁は「」をもつて示し、（一オ）のように丁数ならびに表裏を示した。一字体は底本の表記を重んじて旧字体の場合はほぼそのまま翻刻した。一 花押は（花押）とし、その形態は示さなかつた。

### 【書誌】

行 数	丁 数	卷 数	所 蔵 数	外 題	内 題
二三丁。（一九丁裏白紙）	二三丁。（一九丁裏白紙）	一卷。	架蔵本。	半葉六行無罫、漢字平仮名交じり文。	卷首題「鷹書才覚卷抄出」（一丁表）。
寸法等	縦23・5釐×横16釐。			無し。	
蔵書印等	無し。				

奥書 二三二丁裏に「天正十二年申六月吉日廣田伊賀守藤原朝臣宗綱  
(花押) / 同甚六郎殿」。

### 【本文】

#### 鷹書才覚卷抄出

一 たかをつかひはしむる事は人けん  
のわさにあらす鷹と申は日本國  
そのうへてんかに鳥共みちくくて衆  
生のかうさくをくらひうしなひける  
ほとにてんかの人間はや残すくなに」(一オ)  
なりけるところに毘沙門大鷹不動は  
せう鷹普賢觀音此四仏もろく  
のたかとけんせられ彼とり共をうし  
なひ給ふによりせけんのかうさくうせ  
ざるあひた人間いまたはんしやうすざる  
あひた普賢は上の宮觀音は下のみや」(一ウ)  
とて諏訪上下これ也

一 鷹をつかひはしむるははくさひ國に  
わう一人ましますかまかきのもとに  
鷹と云鳥奉れり是しらふの大  
たかなり彼たかをとりてくれない  
のあけの糸にて鈴をさし大くろの」(二オ)  
鷹たぬきにてすへさせけんせん山と  
いふ山に大せんたうと云谷にて彼鷹  
をつかはせ給ひて誠にゑひ花にほこ  
りあら／＼おほしめし給ふところにたか

ははをひろけてよりおちでしなんとす  
國わうふひんにおほしめしこれか此」(二ウ)  
やまふしつたるものやあるとせんしあり  
しかはおりふしふ人と申もの生むまれ  
所もしらす出きたつてみんと申彼  
ふ人申様かのたかのやまひをはまん  
ひやうちけと申也國わうのせんしには  
さらは此鷹の病やまいをなをしてまいらせ」(三オ)  
よとのせんしなりふ人申様なをして  
申さんとて錦の袋よりくすりを取  
いたしみんしんはかりくれ上にはそゝき  
ければ鷹もとのことくなをりけり  
御門ゑひらんましくて彼薬のほんせつ  
とてもみつからにあかすへしとのせんし」(三ウ)  
なりふ人申やうむかしは長生殿のうちに  
してせんしをかへすためしあれはいか  
てくすりををしへ申さす國わう仰おほせける  
くすりををしへ申さす共  
やうはさあらはなんちかためにはきさい  
國をえさすへとありしかはふ人」(四オ)  
こたへて申様ちやうろくを被下さす共  
せんしならは申へしむかしは長生殿の  
内にしてせんしを七度かへす中ころ  
かひら城の内にしてせんしを五度  
返す今のふ人は國わうおほせママしたかい  
て彼くすりををしへ申也とてあかし申」(四ウ)

けり彼薬は大海たいかいのうろくすにさるあはひ  
と申あわひをかけほしにして山のうさ  
きの角し、ゑにつゝみてかふへしむかし昔  
長生殿のうちにしては鷹のふしの  
くすりと申しんせんのうちにてはあかた  
薬と申今はむそうちかんろと申鷹を」(五才)  
このまん輩にをいては彼くすりをつぶ  
さにしるへしまんひやうちけの薬には  
このうへはあるへからす能々ひすへし  
諏訪すわと申普賢觀音不動毘沙門鷹

となつて鳥共をたやし人間をたすけ  
給ふ衆生しゆしやうにゐ中山人のすかたとなり」(五ウ)  
草薙くさかりかまをこしにさし信濃しなのの國くにに  
帰り給ひて諏訪上下とあらはれ給ふ  
かみの宮みやは普賢下ふげんのみやは觀音にて  
おはしますなり

一  
ゑふくろはゑなふくろ也然間かくゑな袋ふくろと書也  
又ゑふくろ共書也又鳥のつふ子きぬをもひ」(六才)  
ようする也又ふせ衣ふくろをもゑな袋ふくろと  
いふなり

一  
鷹のまかた國よりつたはる事そ  
よう元年八月三日に大國へつたはり候日  
本へわたる事はにんくてんわうの八十七  
年をたもち給ふ四十六年と申とき鷹」(六ウ)  
に彼文書を相そへて日本へわたさるれ  
とも彼文書をよみひらく人もなし

其比大わう鷹かひかねみつといふ者  
日ほんへわたし彼鷹をかはせられて  
あひしおほしめし候ところに彼かねみつ  
鷹をつかひて御門みかどの御目にかけさて」(七才)  
其後しきりにいとまを申けり御門お  
しみ給ひてと、め給へともた、かへ  
らんと申ある公家被申様は人をと、むる  
には女にしくはなしとありければ御門  
けにもと思食美人せん人か中にすく  
れたるこちくと云女をくたさる、彼」(七ウ)  
女房ねはうにつゐてから人かへる事をわすれ  
けり年月をゝくるほどにほとなくむす  
め一人もうくる彼むすめ十五になり  
しどきせいらひのきやうをかねみつ  
かむこになし十八の秘事卅六の口傳  
をしへけりせいらひのきやうの方より」(八才)  
から人のかたへ種々のちやうろくをく  
らるゝから人の方より返報へんぽうとおほし  
くてかりしやうそくの鷹の道具あい相そへ  
てをくるとてかくなん

小ちくてふ事をかたらはふゑたけの  
ひとよのふしを人にかたるな」(八ウ)  
彼こちくかむすめのなをはよねみつと  
申彼よねみつ清水ふつけいのとき  
あるものたかをひとつもちけるか惣そうして  
鳥をとる事なし鷹主五条のはしの

もとにほこをゆひて彼たかをつなぎ上

下の人のひはんをきく彼よねみつ申様」（九〇）

彼鷹の鳥をとらぬも道理也はゝは

たかなれともちゝはみさこにあるあひた

うほをとらては鳥を取へからすと申

そのせうこには鷹はほこよりとはひおつる

か此たかはみさこはをつかふほとにみさこ

の子なると見申也水をあひせて御らん」（九〇）

せよぬれへからすと申水をあひせて

みるにあんのことくぬれすさて彼たかを

いかやうにと申よねみつこたへて申様

さらは河をそにとつきてもちたる犬

を御たつねにて池へ入こいをとらせられ候

へと申一しゆかくなん」（一〇〇）

このうらにみさこにとつくたかあらは

をその子はらむいぬをたつねよ

さてをその子はらむいぬはいかやうなるそ

ととひければよねみつこたへて申様

をその子の犬は四まなこといふさらはとて

四まなこのいぬをたつねでしんせんゑん」（一〇〇）

と云池へ入てこひをさかさせてかの

鷹を合て見ればさういなくこいを

とるなり

はし鷹のますかきのはをとふ時は

なみまのこひもあらはれにけり

其比鷹たかなきあひたかんに口ゑなし」（一一〇）

こひにくちゑありとは彼ひみつありかの  
女房はせいらひか家ぬしなり

はし鷹のしら尾をつくと云事

せいいらひ君の御鷹のくしのおをきり

てく、井のきみしらすにてつく是は

きさらきのころの事也君御らんして（一一〇）

せいらひはきよくなき事をつかまつり

たるとて嶋へなかさせらるへしとの

せんし也せいらひ申様たとへ玉の鷹

なりともにけてはきよくあるへからすたか

と申は春になればふるすをこひてかな

らすきたへかへるなりしら尾をつけは鷹」（一二〇）

身くぢりをするときわか身をかへり見て

わか身にはいまた雪のふりたるよと心

えてふるすをこひぬ也と申ければ

さてはと思食せいらひなかさる、事を

やめ給ひぬときこえけりせいらひか哥に

二月のしらおにのこる雪見れば」（一二一〇）

こゝろまかせに君ゆるし給ふ

御かとの御哥

はし鷹のおのへの雪にまた残り

はな／＼鳥にはやきあらしは

さるあひた鷹をまかた國にてはそのな

をくちと云はくさい國にてはみたらお」（一二三〇）

と云唐土にてははな／＼鳥と云わか

てうにて鷹と云なり

きためなり

五六

はし鷹のとつく時は二月ひかん中日に  
とつく大せうとつかんとする時はとひく  
らへてまけたるせうをはゑちきとするかち  
たるをはつまとさため哥」（一三一ウ）

たかねよりふもとの里にとひくたり

つまこゝろみん羽くらへのたか

大鷹は毘沙門のけんし給へは鞭はほうは  
うなり大緒は御手の糸也

せう鷹は不動のけんし給ふによつて

むちはりけん也大緒はさつくなのはなり真」（一四〇）

言にとる時はむちはさんちやう也ゑかふ事は  
しやすひのみつ也されは三ちやうに寸しやく  
さたまらぬによつて鷹のむちの寸さら  
になし

へうをきなはの心得の事

しうをや其外のあひたのきる、事を（一四一ウ）

つなくなはなり

鷹をつかふにかうさくをそんさす事

有へからすそれをいかにと云に前にあら  
はすことく四仏鷹とけんし給ふ事

も衆生をたすけんためほんせつなれ

は第一には彼せつをふみやうにたるへし」（一五〇）

ゆかけの大五の心えの事

一 ゆかけをさす事は手のいたみをよけ  
へきため也

一 鷹は仏にてましませはちをよけへ

一 たかは四仏にましませはきう中又手」（一五〇）  
に取物其外の不淨をよけんかためなり

一 かう家のをそれしんしやくをへたつる也  
然間たかひにすこふしをは斟酌する物也

一 かんねつをよけへきためなり

一 鞭に三の心えの事

一 むちにて毛羽をなをせはきとうになり」（一六〇）  
なり是不動のりけんなるゆへなり

一 むちにてあくまできあきふさかり  
を払なり

一 ふちはもろくの鷹のくすりなるあひた  
むち水をかふへきためなり

一 せこ杖かりつゑいぬかひ杖のいはれは」（一六一ウ）  
毘沙門のほうはうなれはひんをはよけ福は  
来れるはう也又ほうはうなれは成仏とく

たうの杖となるなり

一 鷹をはしたかと云事

一条のゐんの御とき鷹をこのませ給ひて

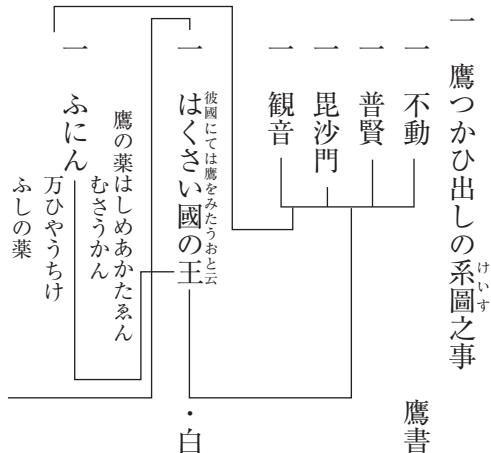
つかはせ給ふとき三条のいんの御時無常の」（一七〇）

かせにさそはれ給ひて彼鷹をはなし  
たまふ此鷹よそもゆかすして内裏の

しらすのきりのきのもとに羽をやす

め三条院の御事を思ひ入たるふせいにて

ありしか三てうのゐんの御はかところにした  
をくゐきりしめる也きさき哀に思食」（一七一ウ）



(半葉分白紙)

ともすりにすれきひ／＼となる鷹の」（一八〇）  
と思食おぼしめしそれより此かたはし鷹と云へり  
琴のかうに桐きりの木をする事も此御代かのごと  
よりはしまれり彼琴の音も鷹の  
こゑにまかはす哥マツに  
琴の音こゑも聞きやまかはぬ橋鷹のはしだか（一八一）  
とかへり山さんやもみちしぬらん  
はし鷹のいはれ是ほんせつ也可秘云（一九〇）

鷹書は彼四仏の御作なり  
是鷹のほんち又鷹の  
しにもなり給ふ也普賢  
觀音はすはのほん事也」(一〇〇)

一 あし原國の王・白 をたもち給ふ四十六年と云  
我朝にて鷹と云より慶をさくるにおくと嘆也鷹とよぶ心也  
鷹と云字おうのこゑたる故也

時の正月三日に渡也

一 太國の住人兼光・黒 これより又一流あり

大唐より鷹と彼書を相添て我かてうへ」(二二才)

もなし其比大王鷹かいかねみつと云ものを  
日本へわたし給ふ彼かねみつを相留政頼卿  
むこになり十八の秘事卅六の口傳かり  
しやうそくをゆるさる、也そのほか才覚  
の巻に細にしてるす也」(二二ウ)

かねみつかむすめ政頼か家主也

此鷹うかふ事もやあるらんとうらなひせとありしかははかせうらなひ申様彼すのきりの木を切り河にはしにかけさせられ本のふときところをは琴のかうにさせられければ彼はしの二またなるか

彼國にては鷹をくちと云  
またひ國の王　・ 黒  
さうやう元年八月三日に  
よりまた國へ鷹渡也」(一一〇ウ)

天正十二年六月吉日廣田伊賀守藤原朝臣宗綱  
〔同甚六郎殿〕（二三ニウ）  
（花押）

## 〔付記〕

本稿は、科学研究費補助金（基盤研究C、課題番号200520189、研究代表者 中本大）による研究成果の一部である。  
(本学文学部非常勤講師)